木知原の今昔！

49号：24・10・25

明治シリーズ〔iv〕

馬子：駄馬に人や荷物を乗せて運ぶことを生業としている人。
武士は平均して100石以上。（主水や斬九郎家では飼えない）

馬の耳に念仏・馬耳東風・夕立は馬の背を分ける・・・昔から身近な「馬」

馬の飼育は江戸時代まで武家と馬子（まご）にしか許可が出なかった。一般農家で飼育が盛んになったのは、明治2年（1869）東京・横浜間で**乗合馬車の**営業開始がきっかけとのこと。

馬は**農耕**や**馬車**の他に**肥料**も得られることから農家にとっては「お馬様」であった。

“馬稼ぎ”（うまかせぎ）とは、耳慣れない言葉であるが、馬に荷物を運ばせる運送業（者）で古くは馬借（ばしゃく）とも言った。

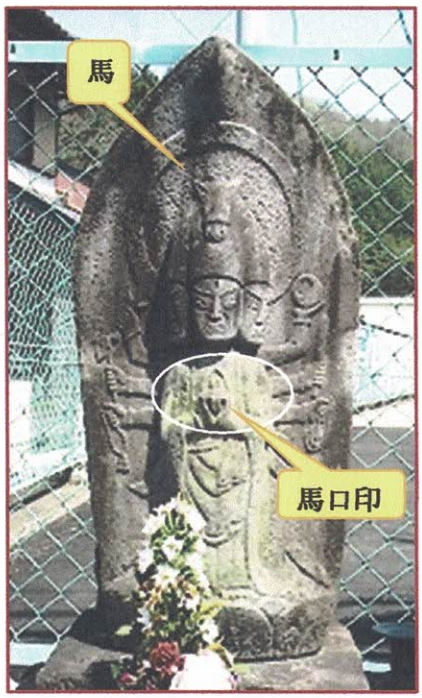
昭和53年
筋甲斐で撮影

- 木知原では明治の中頃から馬を飼う農家が多くなり大正時代の最盛期には村の三分の一にあたる**15軒**が**運送業**に従事していた。
- その世情を今に伝える史跡の一つが「**馬頭観音像**」である。

馬頭観音像

は菩薩の化身の一つで必ずしも馬の守護神ではなかったが、馬が農作業や運搬手段として庶民の生活と結びつくようになると、馬の無病息災を祈願して村々で祀られるようになった。

木知原の馬頭観音像は**明治22年**（1889）に「**馬の守護仏**」として村で祀られている。



像容は頭上に馬頭を戴き厳しい顔をしているのが特徴で「**馬頭明王**」とも称されている。

- 木知原の観音像は「**三面八臂**（はっぴ）」の立像である。
- 両手を合掌しているように見えるのは「馬口印」と言って馬の口を模した印（仏の手を表現）を結んでいる。
  「親指・中指・小指を立て、人差し指と薬指をまげて両手をあわせている」 ≪韻（印）を切ってみましょう≫
- 手には「**剣・斧・念珠**」などを持っている。
  ・剣は八臂の像に多いが木知原の像は8本の腕があり剣を持っている。

観音像は村の下位に祀られている村（外山内）が多いがきっと馬の守護と同時に『気を付けて行ってらっしゃい！』の意も込められているのではと思う？（木知原も当初は村下）

- 運送業は日帰り範囲であったが、村から離れる機会が少ない当時は他地区との情報交流を深める一役を担っていた。

婚姻仲介役ケースも多く、一時尻毛や糸貫席田街道筋からの嫁入りが多かったと聞くがうなづけますね。

明治廿二年七月二日

木知原の馬頭観音像にはオマケの話題がある。
観音像が祀られた期日の表記に
「**明治廿二年七月二日　木知洞村**」 とある。

- 木知原の「**原**」に「**洞**」の文字が刻まれていて珍しい。

村が「洞」と依頼したのか、石工が思い込みで刻んだのか？憶測が楽しめる事象である。皆さんの想いは？
・村名由来のキーワードにもなりそうである。